

〈 小さな島の将来像「長島しま・コミュニティ形成」の提案 〉

Proposal for establishing 'Nagashima-Island・Community' as a future image of a small island

業務名	長島漁港漁業集落下水道緊急整備基本計画策定（14-148）
委託者	長崎県郷ノ浦町
担当者	笠原卓，（大島肇）

Nagashima district is just typical remote island with very disadvantageous environment. Irrespective of such conditions, the population remains as it is and many children are living. In the light of the master plan for environmental improvement in the fishing community, 'Nagashima-Island・Community' plan was proposed as a future image with a key vision for improvement of living conditions.

Key words: development of remote island, public involvement type planning, community environment improvement work

1. 調査の目的

離島のなかのさらに離島で漁業を主要産業とする地区において地区住民の参加を図りながら、漁業集落環境整備事業の基本計画策定を行った。

長島地区のある壱岐島は、図-1 に示す通り長崎県北部の玄海灘にある東西約 15km，南北約 17km の比較的平坦な島であり，郷ノ浦町のほか，勝本町，石田町，芦辺町がある。郷ノ浦町は島の南西部に位置している。調査対象地区である長島地区は，郷ノ浦町の西方約 6km の海上に浮かぶ 3 島（大島・原島・長島）ある離島のうちの 1 島であり，第 4 種大島漁港の分区の背後集落である。長島地区への交通手段は，郷ノ浦港から町営フェリー，海上タクシーあるいは個人の漁船が利用されている。



図-1 壱岐島の位置

2. 調査の方法

調査は，図-2 に示す漁業集落環境整備事業における基本的なフローに従い実施した。住民懇談会を 2 回行ったほか，住民の代表者への地区生活や漁業活動に関するヒアリングを実施した。また，初回の現地調査にも住民の代表の方数名に参加頂いた。住民懇談会では，漁業集落環境整備事業の事業概要の説明，基本計画案の策定等を行った。世帯主のみならず若い母親や乳幼児まで参加して活発に意見交換を行う場となった。



第 1 回現地調査の様子

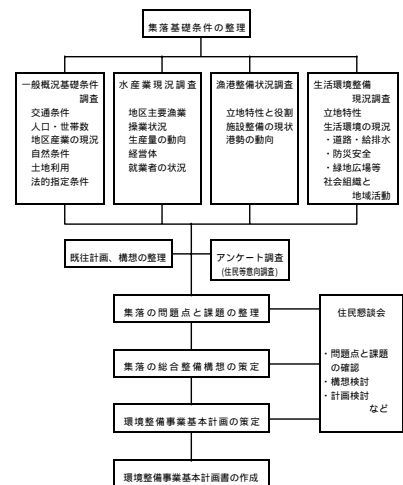


図-2 調査フロー

3. 主な調査結果

3.1 地区の現況

平成 14 年現在(旧郷ノ浦町調査), 地区の人口は 159 人, 世帯数は 36 戸であり, 最近 20 年間この規模を維持している。同期間における全国の多くの漁村地域の傾向や郷ノ浦町の人口が約 2 割程度減少していることに比べ, 大きな特徴となっている。また, 人口が維持されているのみならず, 15 歳以下の若年層も地区人口の約 2 割に達している。

地区内の世帯のうち, 公務員世帯等を除き, 8 割が漁家で, いか釣, 一本釣, 潜水, 建網, 採藻を営んでいる。沖合での操業もある。いか釣以外は, 地区周辺の沿岸漁業で日帰りの操業であり, 比較的労働条件には恵まれている。なお, 女性の漁業就業は, ういのむき身加工等に限られ, 多くの場合, 地区の女性はパート等町内の他業種に就業している。

生活環境上の問題点や今後の島の将来像を考えていく為に, ヒアリング調査及び地区住民へのアンケート調査を行った。結果は図-3 の通りである。特に, 海域環境保全, 魚価向上, 医療・教育・福祉の充実への意向といった基本的な生活に係る事項及び道路・下水道, 交通条件といった基盤整備に係る事項への意向が高かった。一方, 本地区の将来にとって鍵となる交流に関する事項は低い傾向が見られた。

ヒアリング調査では, 他地区から移り住んできて, 基本的には大きな不満はないとの意見が出された。背景としては, 例えば, 子供たちを世帯別ではなく, 共同で育てている様な地区の一体感があり, 特に, 子供を持つ女性には大きな安心感をもたらしている点があると考えられる。島の魅力としては, ほかに風光明媚な景観や温暖な気候といった面も挙げられた。不安な面としては, 離島であるため, アンケート結果同様に医療や福祉の面での不安や通学や買い物時の交通の不便を感じる点等が挙げられた。

漁業については, 最近の不漁への懸念はたいへん大きく, 子供たちが漁業を継いでいくことにも不安を感じているとの声も聞かれた。しかし, 基本的には, 子供たちが漁業に就業する事には否定的な感情はないとのことである。今のところ, 子供たちが望めば後を継がせる考えが一般的な様である。

漁家の平均的なライフスタイルは, 表-1 に示す通り長男が高校を卒業後あるいは一旦都会に出た後 U ターンし, 漁業を継ぎ, 両親と同居, 両親が一定の年齢に達すると同じ敷地内に隠居部屋を建て居を移すという形態となっている。

また, 牛を飼い, 島全体を畑地利用する半農半漁の暮らしから漁業中心の産業への変化, 地区独自の祭りの衰退といった, 小さな島においても地区生活が大きく様変わりしてきていることや, 就職や結婚等で住民が広い範



住民懇談会の様子

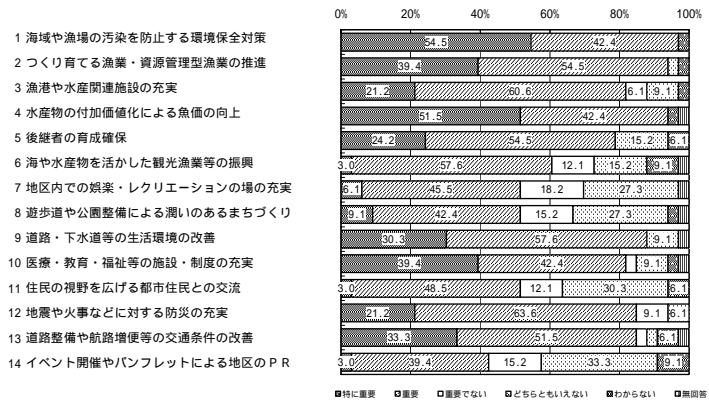


図-3 地域振興に関するアンケート結果

表-1 漁家のライフスタイル

高年齢夫婦世帯・親同居(隠居)タイプ	出身: 佐賀県唐津市で、母が島に嫁ぐ 家庭構成: 長男・妻・漁師・妻・長男・長女の3人家族 高橋までの夫婦の間の片方の母の専業主婦を担う仕事をしており、母にいかの陸揚げに現れた現在の夫と知り合い。昭和52年に嫁く。夫は学校卒業後、専業主婦に転じたが、2-3ヶ月で帰郷する。その後、佐賀で有明海資源の手伝い。高橋の漁師の専業主婦を経て、家庭の漁業を継いだ。
主婦51歳	昭和52年に結婚後、夫の再婚と同居。昭和56年に敷地内に隠居部屋を建てて別居をはじめ。島内(同一世帯)で漁業を営む。漁師の専業主婦に転じた。島の交通整備としては、道路より、船は時間的余裕がある。
主婦47歳	今後の展望 漁業に夫は興味を持っていないが常時は難いと思う。親戚から島の観光の打診があり、島の観光の提供や案内業務を行った。 出身: 大阪出身。母が長島出身で両親について長島にきた。 家庭構成: 長男・妻・漁師・妻・長男・長女の3人家族 現在にいたる経緯 1歳の時に親について長島に来る。中学卒業後、集団就職で名古屋の紡績工場で2年、福岡で更に2年働いた。その後、昭和55年に長島に嫁る。若い頃は島外に出たことがない。 島の暮らし 保育所は現在の公民館(老人塾)の1階だった。かつて、公民館にテレビが設置された当時は、みんなで一緒に見た。母は10歳前後まで専業主婦に勤めていた。集落の婦人会などで上の世代に気を使ってきた世代と違って、今は若い人たちの発言権が十分確保されている。救急病院は福岡の方が近いが、長崎に搬送されている。若は度で出陣し、キャンプを作っていた。今は15歳(1)10歳(1)1軒(2-3)が飼育しているが、前の世代が60歳を超えて隠居した時に殆どが「年齢い」をやめた。 今後の展望 漁業については漁が悪いので息子の漁師就業は難しいと思う。巻紙本島が福岡市内等に勤めてくれば近くにいる場所がある。
高年齢夫婦世帯・親同居(隠居)タイプ	出身: 長島地区 家庭構成 長男(33歳)・妻(57歳)・子(男子6歳)・子(男子1歳半)・子(男子8ヶ月)の7人家族(両親は隠居部屋住まい) 両親と男(32歳土木作業員)及び4男(27歳無職)が同居中で同居している。 現在にいたる経緯 父親は、中学卒業後、3-4年沿岸漁業に専業した後、新潟、北海道等で大企業まで期間の乗組員として働いた。その後、23歳の時に長島に帰った。 本人(長男)は、中学卒業後、職業安定所に通い、16歳の時に専業主婦で電気関係の仕事に就く。その後、24歳の時に長島へ帰郷し、父の仕事を手伝っていたが、平成11年から漁師になる。 島の暮らし 平成12年に石田町の飲み会知り合った女性(現在の妻)と結婚。妻は子育てが忙しすぎる。パートで働かないと聞いている。友人から畑を借りて、自給程度の農業はやっている。島内には耕作放棄農地が多量にない。駐車場は各世帯敷地内にある。車は1台。バイクは1台。家のレジャーや書庫が多い。消防団は15人くらい。お祭りなどのまとまりはある。先祖伝来のものを教えるような島独自の歴史はない。 今後の展望 漁業の状況は悪いので将来は難しいと思う。島で交流を断つやえらうという話はあるが、島外でも構わない。
高齢単身世帯	出身: 長島地区 家庭構成: 一人暮らし(息子が2人) 昭和31年に高校を卒業(当時は高校進学は珍しかった)小学校は優良小学校長島分校で先生は1人だった。小学校2-3年生の時に転校を迎えた。転校中乗車人が300人(1)10分以内に駐屯し専用の発電機もあった。戦後、進駐軍のMTRがやって来て軍事施設を建設していた。 病院は長崎までJRで年に3-4回行く。農業は昭和50年頃までは専業主婦が専業主婦だったが、その後、ミニコンの栽培に専念した。 今後の展望 老後は隠居にあるような老人ホームに入らうと思う。息子は島には帰ってこないだろう。先祖からの土地を手放すことになるが、仕方ないと思う。

困で移動していること等も明らかとなった。

3.2 問題点と課題

離島での暮らしの場合、上記の様に交通、医療等への住民の不安は本地区に限らず一般的である。これらを解消していくには、大きな投資や制度の大幅な改正等が必要であり現実的には短期的な解決が難しい場合が多い。私達は、こうした問題も理解しつつ、当面、現実に自治体レベルで取組み、かつ、住民の要望も高い地区内の生活環境の改善に焦点を絞り、地区住民と共に議論し地区内を点検することで生活環境の見直しを行った（図-4 参照）。

本地区では、沿岸漁業が地区を支えていることから、水域環境への関心は高く、し尿の処理、家庭雑排水の処理といった排水処理及び集落内が狭隘であることから、集落道の拡幅等基本的な社会資本の改善の要望が多く挙げられた。また、地区内を点検することで、具体的な集落道の狭隘な箇所、傾斜地等危険箇所、使われなくなった井戸の所在等を確認した。

農地利用の変遷、新たな住宅立地といった地区内の土地利用の変遷も把握した。



図-4 地区の問題点

3.3 将来像「長島しま・コミュニティ」の提案

小規模な地域において生活を継続させていくこと、かつ、都市住民に対しても恩恵を波及させていくことを表明することを意図し、地区の生活環境の改善計画を策定するだけでなく、地区住民が今後どの様にこの地区で生活していくかをも考慮しマスタープランとしてとりまとめた。

(1) 独自の「しま・コミュニティ」の維持

本地区は、離島内小離島という立地特性から、古くから1次産業を基幹とした自給的な独立生活圏として、また、地区住民の意識としても“しま”共同体の性格が強い。これは、本島と架橋（住民はこれを望むが）により結ばれない限り今後も継続する地域特性と考えられる。この地域特性を活かし、活力ある“しま・コミュニティ”を健全に維持していくことが、地区の進むべき道である。活力と独自性を保ちながら“しま・コミュニティ”を維持・発展させていくためには、基幹産業である漁業の振興を核とし、独自の自然環境、小離島としての立地特性を活かした体験交流型の観光振興等を組み合わせた新たな“しま業”の創出といった視点が必要である。

この様な“しま業”の創出に当たっては、担い手づくりや漁業振興と共にそれらを支える社会資本整備も必要である。特に“しま”の暮らしの舞台となる集落の生活環境水準の向上は重要であり、基本的な生活環境基盤整備と共に、医療・福祉や防災に関する暮らしの安心・安全面でのソフト・ハードの体制づくりや“開かれたしま”として、広域交流・連携を支える交通・通信基盤の整備も必要となる。“開かれたしま”であることは、様々な便益を都市住民等多くの人と共有していく為にも必要である。主に漁業集落環境整備事業によるハード面の具体的な方針は、図-5の通り整理される。

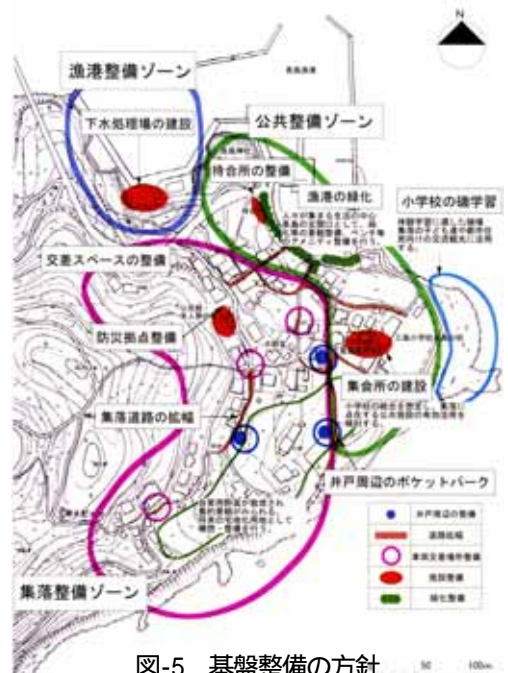


図-5 基盤整備の方針

(2) 漁業を中心とした“しま業”振興による定住条件の整備

後継者の定住条件として、新たな漁業収入の確保が必要であるが、その鍵の一つは、今の高齢者世代が持つ暮らしの記憶に求められる。彼らは、一言で言えば『半農半漁』であるが、島全体を使ったダイナミックな経営で島での暮らしを支えていた。そうした長島のライフスタイルの歴史に学び、現在そして未来の時流にあった、漁業を中心とした長島らしい新たな複合経営“しま業”を展開する必要がある。

具体的には、集落排水の処理による地先海域の水質保全、藻場・増殖場の整備による磯根資源の維持創造、特産型水産加工品の開発・製造、宅配や交流観光を活用した流通戦略等といった「伝統的な基幹産業である漁業の振興」、「自給型農業の拡充」、独自の自然環境等を活かした外部との交流型観光の振興と漁業の連携を図る「アイランドツーリズムの推進」等を提案した。

(3) 安全・安心な“しま”の形成

収入の面ばかりでなく、基本的な生活条件、特に防災、医療、福祉の向上といった地区住民が安心して暮らせる仕組みが必要である。この為、集落の狭隘な道の拡幅や車両の交差可能スペースの整備、防犯灯、消火栓や防火水槽の位置や数量の見直しが必要である。こうした基盤整備のみならず津波や高潮、台風や豪雨等の際の迅速な情報提供と避難誘導等の防災ソフトの充実が重要である。特に、避難・防災対策においては災害弱者である高齢者や子供等の優先誘導体制を“しま”共同体の互助システムを前提に整備する必要がある。また、地区内には病院等の医療・福祉施設が立地していないことから住民の不安は大きく、巡回医療や定期的な保健婦による聞き取り等のプライマリーケア体制を整えると共に、将来的にはパソコンによるインターネット医療相談や診断等の体制整備も念頭に置いた長期的な“しま”型の医療・福祉体制のあり方を考えていくこと等を提案した。

(4) 地域に学ぶ“しま学”の創造

将来、子供たちは島に帰ってこないだろうと感じている住民もみられる。しかし、一方、自らも島を出る事がかつて望み一旦は外に出て行った後、現在島で暮らすことを選択した住民もみられる。子供たちが島に戻るか否かは本人が決めることであるが、“しま”での生活それ自体に彼らが価値を見出し続ける様な土台づくりが必要である。その第一歩は、住民自らが地域を見つめることから始まる。そこで、地域に学ぶ“しま学”を提案した。地区住民が主体となり、外部の人の視点や助言を得つつ、地域の自然・風土、伝統・文化、人の知恵に学ぶことで、地区を客観的に見て、地域の個性を自覚することから始め、地域独自の生活を関係者が共に考え創り上げていくことを目指すものである。また、ここで学び、身に付けた“しま学”は都市住民等外部への情報発信の基礎となり、我が国の文化を一層豊かにしていくものともなる。

4. 成果の活用

今回、多くの地区住民と共に意見を交わし、地区の漁業集落環境整備事業基本計画や将来像等をつくりあげていった。交流については今後の課題となったが、現実的な生活環境の改善計画が策定され、地区の生活が現在より一層魅力のあるものとする一歩が踏み出された。また、作業を通じ、地区住民が自分たちの生活や“しま”を見直すきっかけとなったと考えられる。これを契機として本格的な“しま業”“しま学”への機運が高まることが期待される。

都市部は都市部の、漁村地域は漁村地域の果たしている役割があり、これらの役割は相互に補完的である。一方のみで私達の豊かな生活が実現することはない。人の住まない荒野からおいしい食料はやってこないし、そこでは楽しいレクリエーション活動はできないのである。都市の豊かな生活の少なくない部分を全国津々浦々の漁村地域が支えていることを都市の人々は想像力を働かせて知るべきであるし、漁村地域の人々は誇りとするべきである。

本調査が、基本計画策定における住民参加、我が国の漁村への地域政策のあり方を考える一つの礎となれば幸いである。



図-6 伸びゆく長島の木